

座談会

東南アジア海域世界の森と海

以下は、文部省科学研究費補助金重点領域研究「地球環境の変動と文明の盛衰——新たな文明のパラダイムを求めて」[代表者：伊東俊太郎（国際日本文化研究センター）]の公募研究「海域世界の森と海——21世紀の東南アジアと日本」の総括のために、東南アジア研究センターで行なった座談会の記録である。座談会は、平成4年9月17日に行われ、この公募研究のメンバーであった高谷好一、前田成文、古川久雄、土屋健治、加藤剛、田中耕司（以上東南ア研）、大木昌（八千代国際大学）に加えて、坪内良博、山田勇（いずれも東南ア研）が出席した。司会
は田中が務めた。
(田中耕司)

田中 これから「東南アジア海域世界の森と海」というテーマで座談会を開きたい。この特集号と同じテーマを掲げているが、ここではテーマの全体像を展望することを主眼に、とくに東南アジアの「海域世界」について共通の認識を得られればと思う。そのうえで、海域世界の森と海についても議論を深めていきたい。

そこで、まず、東南アジアの海域世界とはどのような地理的範囲なのかを最初的话题としてとりあげたい。東南アジアの海域世界という場合、誰でもある地理的な範囲を想定していると思うが、具体的にどの範囲をいうのか。これに関連して、前田さんがかなり明快な指摘をかつてしていたように思うので、まず皮切りに前田さんから海域世界の地理的な範囲をどう設定するのか、議論の口火をきってほしい。

I 海域世界の地理的範囲

前田 海域世界を地理的にどうくるかは、そう簡単でない。なぜなら、固有性と地域性の問題が絡んでいるからだ。海域世界の固有性が何かということがはっきりしていれば、おのずとその範囲が決まってくる。だから地域の範囲はどこまでかというとき、その前提として固有性を考えねばならない。私が他の論文で東南アジアの海域世界がこういう範囲だと言ったときも、はっきりと範囲を決めなかった（『流動『農』民ブギス』秋道智彌編『海人の世界』同文館所収予定（未刊）。なお同様の指摘については、前田成文、1992「海域（マレー）世界」矢野暢編『東南アジア学入門』弘文堂、pp. 167-176 及び1989『東南アジアの組織原理』勁草書房を参照）。なぜなら、その固有性のとり方によって範囲が変わってくるからだ。だから固有

性の抽象化の仕方というか、あるいは何を固有性としてとりあげるのかということが重要な問題となってくる。

以上を前提にしたうえで、私は、東南アジアの海域世界の固有性は、熱帯雨林と海とが生態基盤になって、そこに出てきたある種の共通の社会組織原理が見られるところ、というふうに規定している。一つは熱帯雨林と海とで、ある程度範囲が区切られる。それからもう一つは社会組織の方からも区切ることができる。そうすると、だいたい、日本まではいかないだろうとか、オーストラリアまではいかないだろうとか、あるいは中東まではいかないだろうとか、そういう範囲が出てくる。

田中 しょっぱなから固有性と地域性との関連という難しい問題が出てきたが、実は、前田さんはその論文でもう少し明確に地理的な範囲を設定していたのではなかったか。その中で、東南アジア島嶼部がイコール海域世界ではない、東南アジア大陸部の沿岸地域も含めて海域世界としたらどうかと提案している。もう一つは、海域世界は森と海で生態基盤が特徴づけられるが、それだけではなくて森と海の狭間の世界がむしろ海域世界の中心で、もっと具体的に言えば沿岸地域だとか河川沿いが重要で、それらが海域世界のネットワークの結節点になると強調している。そのうえで、そういう広がりをもった世界に固有の社会があり、それが海域世界である、というふうに書いていたと思うが。

前田 そのとおりだ。それは地域の範囲というより、海域世界の核となる部分、海域世界のもっとも海域世界らしい所を中心に考えるとそうなるということだ。

田中 では、高谷さんから同じ点について意見がほしい。

高谷 この特集号で私に与えられたテーマは「森と野と海」で、「野」が入っている。私に言わしむれば東南アジアには森と野と海がある。ところでその野のないところが海域世界だ。結論から言うとそう思っている。東南アジアをまさに生態学的に色塗りしてみる。海は例えばブルー、森は、今は森がかなりなくなってしまったが、19世紀くらいの森を例えばグリーンに塗ってみる。そして同じ時代の野、これはちょっと難しいが、日本の農村みたいなところ、そこではちゃんとした集落が落ち着いてあり、周りには水田が開けている。そういうオープンな景観を野として、それを黄色で塗り分けてみる。どういう格好に東南アジアがなるかというところ、ほとんどのところが海のブルーと森のグリーンになる。黄色はジャワにポツポツと出てくる。他には、カンボジアのトンレサップの周辺から東北タイ、そしてチャオプラヤ川の中流域、それからイラワジ川の中流域に黄色が出てくる。私はこの野のところを省いたところ、結局、森と海だが、そこには前田さんが言うような、いろんな特殊な社会があるように思う。野というのは実際にはインドの文化が入ったところで、インド圏ということになる。大陸部では海岸沿いや大きな川の下流、島嶼部はジャワを除く全部、これを生態学的にいうと海域世界と言っていいのではないか。

田中 前田さんの海域世界の地理的範囲と、高谷さんのとはかなり似かよっていると思うが、前田さん、異論があるだろうか。

前田 高谷さんの切り方だとあまりにも環境決定論になりすぎる。野は生態的に違うから分ける、海と森と野とは生態的に違うから別の物であるとする必要が本当にあるのか。野も海域世界の一つの要素として、まとめてセットとして考えられないか。

高谷 結局は環境設定が問題だ。前田さんが「流動『農』民ブギス」について書いているが、そこで非常に上手に海域世界をとらえていたと思う。それによると、ヌサンタラの生活空間は、海 (laut) と陸 (darat) をつなぐ空間、すなわち川筋 (rantau) であり、濱海 (pesisir) であり、船の廻れる終点 (pangkalan) だとある。これは要するにつなぐ空間というか、接点の問題だ。だから、前田さんが言うとおりの、海は森と別だといって分けるのでは駄目で、それらをつなぐ空間に意味をもたしてはどうかというのに賛成だ。おっしゃるとおり、野には野、海には海、森には森の世界があるといって、その三者が無関係に独立していると考えているわけではない。その境界を出すために色分けしてみたということだ。

大木 面白い本があるので紹介したい (Houben, V. J. H.; Maier, H. M. J.; and van der Molen, W. eds., 1992, *Looking in Old Mirrors: The Java Sea*. Leiden: Vahgroep TCZAO). これはジャワ海を歴史的に特集したもので、その中でとくに注目したいのは、東南アジアの海域世界といったときに本当にひとつとして考えていいのかということを指摘している点だ。ちょうどブローデルが地中海世界を語るときに用意周到にイオニア海はイオニア海であり、アドリア海はアドリア海であるとしているように、東南アジアの海域をいくつかの部分に分けている。マラッカ海峡世界、東ジャワ海世界、南シナ海世界というふうに。こうして分けたときに、そこに何か固有のものが抽出できるかどうかについてはこの本では誰もまだ解答を与えていないけれども、すごく面白い問題提起だなという気がした。

II 海域世界とムラユ世界・ジャワ世界

田中 生態基盤による区分けにもとづいて、高谷さんからジャワを除く森と海の空間が海域世界であるという話が出た。また、大木さんからは、海域世界をいくつかに細分する問題提起もあった。これに関連して、「マレー世界」あるいは「ジャワ世界」という地域と海域世界とが同じなのかどうかを議論しておいたらどうか。あるいは「ミナンカバウ世界」との対照も必要かも知れない。まず古川さんの言う「ムラユ世界」は海域世界と重なるのかどうか、その点はどうか。

古川 ムラユ世界はもちろん海域世界だと思う。

田中 そうすると海域世界はムラユ世界か。

古川 海域世界はもちろんムラユ世界を含んでおり、もっと広い地域だ。ただ、ムラユのいるところとか彼らの生活の仕方は、前田さんの指摘した性格を強く持っているという意味で、典型的な海域世界だ。ところで、高谷さんの言う「森と野と海」は、感覚的にわかるが、もう一つははっきりしない。野というのは何か。ジャワは野だと言うけれども、海域世界とどう違うのか。そのあたりを少し説明してほしい。

田中 高谷さんが言った野をはっきりさせろという注文だが、どうか。

高谷 私がイメージしている野というのは、自分が生まれた近江の世界だ。そこには長年変わらない同じ風景がある。続いている。自分が見ているものも、父親が見ているものも、おじいちゃんもその前もたぶん同じような景観を見ている。その景観は何かというと、コンパクトなムラである。そこには立派な水田があり、立派な家がある。東南アジアだと、樹々に囲まれたムラがあって、その周りが開けていて、稲などがたわわに稔っている。そんな感じのところだ。そこにあるものは長年安定している人間くさい空間だ。森みたいに、入っていったら怖いというのではなくて、オープンなスペースだ。そういう感じのところを野と言っている。

田中 イメージはわかるが、具体的に、ジャワは海域世界には入れないという立場か。

高谷 その是非は議論したほうがいい。海域世界は、これも前田さんが指摘したことだが、ネットワークとか流動性とか二者関係だとか極めて分散的な小さな輪の連続だとか、そういう属性をもっている。それを持っているところを海域世界とすると、ジャワは入らないと思う。しかし、そういう属性をもつ地域の地理的空間の外縁を引こうとすると、例えば、ジャワは大きな東南アジアの海域世界の中に、一つだけ極めて特異的にかつ濃厚に野のある島ということになる。だからこれは定義にかかわることで、属性で地域を細分するのか、あるいは中にヘテロなものを取り込みながらもある属性を共有する大きな外枠で区切るのか、議論が分かれるところだ。前者の立場で言うと、ジャワは野だと思う。従って海域世界には入らない。しかし、後者の立場だと、にもかかわらず、おおきな東南アジア海域世界に取り込まれた野の島ということになる。

古川 歴史的にジャワはいつごろからそうなるのか。

田中 土屋さんにうかがいたい。

土屋 歴史的にみると、たぶん昔のジャワは違ったと思う。ジャワの歴史の大きな転換点はイスラームが入ってきてマジャパヒトが滅んだ時だ。その時に、イスラームの王権が、当初はジャワの北海岸に拠点をおいていたにもかかわらず、そこから内陸へ南行してジャワのふるさとであり、プランバナンの聖跡群とメラピの聖山の聳え立つマタラムの地域に戻ってくる。そこでマタラム王国が16世紀の終わりくらいにできる。そのマタラム王国をつくったといわれるスノパティが南海を治める女神ニャイ・ロロ・キドゥルのもとで霊力を手に入れる、というような物語が王国年代記に出てくる。これはかなり象徴的だと思う。なぜ象徴的かというと、い

ま問題の東南アジアの海域世界の中で、ジャワだけが海に対する観念体系を著しく異にしている、海に対して極めて明晰な考え方をもっているからだ。海域世界は海と森からなると言うが、海と森の関係はきちっと論じられていない。海は人々が自由に往来する開かれた世界だが、森はなにか怖いところだという。しかし、その森と海との関係は、はっきりしていないと思う。ジャワ人の考え方では、海も森も極めて恐ろしい、恐ろしいけれどもそこに聖なる何かがある。だから修行の旅に森にわけ入る。同じようにニャイ・ロロ・キドゥルと会うために南の海に出ていく。ワヤンの場合だと、ビーマが自分の本質に巡り会うために海へ旅立つ。しかも、ここが重要なポイントだが、その時の海というのは、皆さんが海域世界と考えている、波が穏やかで人々の行き交うジャワ海やシャム湾や南シナ海と違って、ジャワ島の南に広がっている范漠とした海、南極に到るまで島影もない荒ぶる海である。そこで自分自身の本質であるデワルチという神に出会って、そこで命の真理みたいなものをつかむ。これはもはやマハーバーラタのインド起源の物語と完全に離れており、ジャワ起源だ。高谷さんが言ったように、野の世界にはインドの文化が入ってきている。けれどもジャワだけはインドにもなかった荒ぶる海というものを、森と等価なものとして位置づける観念体系を作り上げている。ジャワでは、森と海が彼らの世界観の中に位置づけられている。海も森も一方で聖域であり、一方で不可思議な霊力をもつ精霊が住む怖いところだ。だから、そこに行けば命の水を得たり、聖なる水に会える。そういう意味で、森と海とを観念世界の中にしっかりと位置づけたことによって、極めて完成度の高い文化体系が作り出されたと思う。

古川 では、ジャワは完成度の高い海域なのか。

土屋 やっぱり海域だと思う。海の世界を自分のもっともミスティカルな本質部分として捉えこんでいる。ジャワはやっぱり海域。

田中 高谷さんが最初に言った生態基盤としての属性からいうと、ジャワはもはや海域世界ではない。けれども、大きな、海域世界の歴史的なダイナミズムのなかで見ると、ジャワも海域世界だと理解しておいてどうか。

土屋 古川さんの歴史的にどうかという質問だが、よくわからないのは、なぜ16世紀くらいにジャワの政治的経済的中心がジャワ北岸の港から再び内陸に戻ってくるかだ。内陸へ戻った後は、北岸の港はオランダによって押さえられるから、植民地権力によってジャワは海から切り離される。ジャワに残された海はもはや南の方の波の荒い海しかない。波の荒い海というのはそれまでとはまったく違う海だ。しかし、オランダが入ってくる前になぜジャワが自分で欲して内に戻っていったのか、荒ぶる海と対面するようになったのかがわからない。

田中 ジャワはこれくらいにして、ミナンカバウはどうなのか。加藤さんにうかがいたい。

加藤 ミナンカバウを話す前に、歴史のことをせっかく古川さんが提出したので話したい。要するに、海域世界とか東南アジア海域世界というのは、かなり地理的に区切ることができる

単位であって、通時的にイメージできる。しかし、マレー世界とか、ジャワ世界とかは、かなり歴史的に考えないといけないと思う。もちろん、われわれがいまマレー世界として理解しているものはかなり古い時代からあるが、私自身はマレー世界を考える場合はマラッカあたりが一つの出発点だと考えている。土屋さんが言うジャワ的な完成度の高い海に対する考え方もわかるが、それが出てきたのは16世紀ではないか。ジャワが内陸に引っ込んだ時を一つの出発点にして考えるのか、ヒンズー化の時代を考えるのか、あるいはそれとは関係なく、ジャワは本来的に土屋さんが言ったようなものをもつと考えるのか、その点を議論できないか。

土屋 結局は、ジャワのワヤンがいつできたかということだが、デワルチ物語というジャワ起源のワヤンが形を成してくるのはマジャパヒトの後期だ。だからそんなに昔にそういうものがあつたのではなくて、マジャパヒトの後期からイスラームが入ってくる頃にいわゆるジャワ的なものが顕著に出てきた。

田中 ところで、ミナンカバウの場合はどうか。

加藤 私は歴史的に考えたいという立場だ。14世紀後半にアディティヤワルマンがマジャパヒトから移ってくる前の状況はよくわからない。おそらく河川の状態を考えると昔から内陸にいたミナンカバウもマラッカ海峡にすでに出ていたと思う。内陸部にラジャと言われる王様がいて、エコロジ的に高谷さんが言う野的な空間がバリサン山脈の盆地に成立していたが、おそらく14世紀の後半以降は、むしろバリサン山脈から東海岸に流れている河川沿いに人々が農民として移り住んでいた。そこで魚をとったり、川沿いに海の世界にしょっちゅう出ていたと思うので、盆地とは違った生態基盤の地域に住む人々が明確に海域世界の中に取り込まれていたと思う。だからミナンカバウ全体というよりも、むしろ、歴史の時間性の違いと、ミナンカバウ世界の生態基盤の違いによって海域世界とのつながりの強さが違っていたと考えたい。

田中 ミナンカバウ世界全体ではないが、その一部は海域世界に入っているという立場か。

加藤 そうだが、強調したいのは海域世界との関わりは、ゼロか100かという関わり方ではなく、相対的な強さ弱さの問題だ。さらに言えば、「弱いところ」も、「強いところ」を媒介として海域世界とつながっていたということだ。

大木 ミナンカバウというのは、商業の交易パターンを見ていると非常に面白い。例えば、ある一人の商人が成り行きでいろんなものを交換していく。そして最後にマラッカまでやっていく。もし間を取り次ぐ人がいれば、そのミナンカバウの商人はその人との間を往復していればいいはずなのだが、実際には商品の交換を繰り返しながら、最後はマラッカまでいってしまう。そうすると海と内陸とその両者をつなぐ世界というふうに分けるのは、少なくともミナンカバウの場合には当てはまらない。

土屋 ジャワの話にもう一度もどりたい。仮りに私が言うようにジャワが海を観念体系の中にきちっと位置づけていたとすると、海域世界で生きてきた人々はいったい海をどんなふう

考えていたのか。森はわかる。いいものもあるけれど怖いものもある。しかし海はどうか。海はみんなのもので、ネットワークをつくる舞台となるけれども、命もなんにもない空間なのか、それとももっと積極的に、ジャワのように海へ行くとそこには命の水がある、そんな位置づけがなされているのか、他の例を説明してもらえないか。

田中 これは前田さんだ。ブギス人がどう海をみているか話してほしい。

前田 庶民のレベルでみるのか、神話伝説のレベルでみるのか、いろいろあって一概には言えない。例えば、ブギス人やマカッサル人は、航海者として有名であるが、山に住んでいる人に聞けば海は怖いと言う。だから庶民の海の概念を出すのは難しい。神話伝説のレベルでは、天上、地上、地界があり、地界は海の世界でもある。海の世界は天上と往き来している。天上の神が海に行ったり、海の神が天上へ行ったり、あるいは地上に降りてきた天上からの神が海の底から出てきた女神と結婚する。だから、神話のレベルでは海に対する見方はジャワと似ている。ただ、土屋さんの話を聞いて沖縄のニライカナイを思い出した。だから、島である限りそんな考え方が一般的ではないかとも思う。海は非常に怖いところだが、自分達の来たところでもある。さっきのジャワの話も、その萌芽は島という環境のなかで出てきたと考えられないか。

土屋 するとやっぱりジャワは海域世界になるのか。

前田 それはわからない。

田中 ミナンカバウでもそういう伝説があるか。

加藤 祖先がやってきたのは海で、船に乗ってきたという話とか、マレー世界に一般的にみられるマリン・クンダンという成功した船乗りの親不孝物語などがあるが、ジャワのような海から神秘的な力を得るというような話はない。

Ⅲ 海域世界の固有性

田中 結論的には、ジャワ、ミナンカバウといった、いわば野の世界も海域世界に入れるということにして、次に進みたい。東南アジア島嶼部の森と海だけでなく、濱海部、川沿いといった、海と森の接点の地域、そしてその狭間が拡大した野の世界も含めて、海域世界と考えたい。そういう地域を設定したうえで、前田さんが最初に出した固有性の問題を話し合いたい。前田さんは海域世界の固有性として、三つをあげている。第一は常に人々が離散する世界、第二は何もかも商品化する世界、第三は一番と二番から出てくる属性かも知れないが、ネットワーク性。これは人の関係でもあるし、空間的な社会の成立ちそのものでもある。前田さん、その点について付け加えることはあるか。

前田 プロトタイプということで、三つをあげた。そのプロトタイプに含まれる全部の特徴

を海域世界の人々が持っているというわけではない。そのプロトタイプを基礎にして、さまざまな発展形態がある。海に特化する人もあるし、森に特化する人もある。特化あるいは特殊化していった社会もあることを考慮に入れたうえで、この三つが海域世界を形づくる契機になったのではないかということだ。

高谷 私は近江平野のまん中に生まれた百姓のせがれだ。その百姓のせがれが中学校のおわりか高校の時、旅行にいったアッと思うことが何回もあった。港の船のあるところに行くと全然気分が違う。ここならどんな悪いことをしても旅の恥は掻き捨て、酒飲んで喧嘩しても顔はわからん。今日は思う存分悪いことしてやろう。そんな気分になったものだ。田舎と違い、港は強烈で、なんと魅力的なところやという感じがあった。長じてからも基本的にはその感じだ。ネットワーク性とか、商品化とか言うが、もっと本質的なものはコミュニタス的な性格といったものではないかと考えている。海域性の核心的な性格をそんなふうに感じている。

加藤 どうも混乱してしまう。海域世界一般のことを話しているのか、東南アジアの海域世界なのか。混乱している。例えば、いまの高谷さんの話はどこでも通用する話だ。

高谷 実は、加藤さんの言うとおりで。ワールドワイドな海域世界があると思う。それを議論することも必要だ。そのうえで、東南アジアの海域世界とは何かを議論したほうがいい。いま私が、これが海域世界の原イメージだとして述べたのは東南アジアだけにあてはまるのではない。私はこれをインドで経験し、ペルシャで経験し、あるいは日本で経験している。

田中 いまは、東南アジア海域世界の特徴ないしは固有性の議論に焦点を絞ってほしい。

高谷 結論から言うと、港はええ、なんぼ悪いことをしてもええ、こんなええところはない、というのが一つ。プラス、「東南アジアの」と言ったときには、後ろに恐い山があり、恐い森がある。恐い森を後ろに控えた港というのが私の最終的な結論だ。それが、東南アジアの海域世界だ。

土屋 古川さんの『インドネシアの低湿地』（古川久雄，1992『インドネシアの低湿地』勁草書房）に、ムラユ世界は一期一会の世界だ、とある。一期一会の世界は高谷さんが言った港の気分に通じる。ところが、一期一会の世界で人々がだましあい、悪いことをし、したい放題にするかという、決してそうではない。一期一会とは違う大原則が、つまり高谷さんが言ったのとはまた別の論理が東南アジアの海の世界に働いているのではないか。ジャワは明らかにそうだ。ジャワでは一期一会でなく、人々は他人の強い眼差しを意識して生活している。そんなものは非歴史的だと感じるかも知れないが、東南アジア海域世界の核心部にそういう眼差しで象徴されるような社会関係があるのではないか。

田中 対人関係のバランスを持った世界だ。

土屋 一期一会の無限連鎖がネットワークだ。とすると、一期一会を無限に連鎖させてきたのは、もはや東南アジアの海域世界の背後には深い森があるというような話ではなく、社会の

組織原理そのものではないかと思う。

Ⅳ 海域世界の生態基盤と生業

田中 ちょっと議論にブレーキをかけたい。東南アジア海域世界の固有性について、もう少し可視的なあるいは物質的な側面についてまず議論したほうがよいと思う。生態基盤ないしは生業のレベルで他の地域と違う固有性があるのかどうかをはっきりしておきたい。海はどこまで行っても海かも知れないが、古川さんが『インドネシアの低湿地』で描いたような海は、他の地域の海と違うようだ。まず生態基盤あるいは生業について東南アジア海域世界の固有性が語れるのかどうかを議論してから、社会の組織原理に話を進めたい。生態基盤や生業の固有性という視点から、古川さんあるいは山田さんから何か話してほしい。

山田 いつも高谷さんは森は怖いところだと言う。そのたびに私は反対する。森は実はものすごくいいところで、森に長いこと入った経験のある人なら、皆そう言う。たんに森を研究している者だけでなく、森で生活している人ももちろんそうだ。森で狩猟採集をやってきたプナンなんかは森がいちばん居心地のいいところだと思っている。森の中に入っている限りは安心だが、森から一步出て、ダヤックのロングハウスへ行くとか、焼き畑の炎天下のところへ出るとか、違う環境のところに出ると身体の調子も悪くなり、情緒不安定になり、すぐに森に帰りがたがる。森が怖いという人は外から森を見ている人だ。そういう人でも20年とか25年住んでみると、森はいい空間になってくる。そういうことを背景に海域世界を考えたいが、いつも非常におかしいと思うのは、海域世界の森というときに、そのイメージがはっきりしないということだ。それをもっと明確にする必要がある。

そういう意味で東南アジアの森を考えると、東南アジアの海域世界は群島からなるという点が重要だ。島であるということは大きな川がないということだ。小さな川が微地形を造り、環境条件も複雑だ。そこに多様な森林の生物世界があって、しかも海までの距離が意外と短い。ボルネオのいちばん山の中からも海に近づこうと思えば非常に楽だ。いちばん奥にプナンがいて、海とプナンの間にカヤンとかケニヤとかいう焼き畑の民族がいる。そこへ入ってくる中国人がいて、海と森林のいちばん奥までが一つにつながっている世界だ。そのへんがアフリカとか南米の森と違う。それと資源量の多さという点。とくにロタンとか樹脂類、それから材の良さという点では東南アジアの森林は非常に優れている。

田中 森の位置づけがはっきりしないという指摘があったが、実際には森と海が非常に近いわけだ。ただ、その場合、森に住むのは海域世界の人々と言えるのか。

山田 海域世界の中心になっているのは商人だと思う。前田さんの言う、離散するとか、商品化するとか、ネットワーク性というのは商売人の性格だ。海域世界でなくとも京都の商売人

でも同じことをやっている。

田中 生態基盤からみた海域世界の固有性について話してほしい。

古川 生態基盤というような難しいことはさておいて、海と森を対比して私の体験を話したい。海にはある種の強力なエネルギーを秘めた空間がある。タンジュンとか、岬とかがそうだ。じっと座っていると大変なエネルギーを感じる。見晴らしはいいけれど、恐いくらいだ。森はそういうところと違って、非常に重苦しい。これも恐い空間だけれど、エネルギーの質が違うような気がする。

田中 生態基盤を突き抜けて、もっと難しい話が飛び出してきてしまった。例えば、いま山田さんが例にあげた森の民は森の中に住んでいて気持ちがいい。恐いとは思っていない。ところで、沿岸に住んでいるムラユも海は恐いとは思っていないのではないか。

古川 いや、そんなことはない。いま言った岬などは、海に住んでいる連中も恐がっている。

高谷 山田さんは森は恐くないと言う。だけど、私はやっぱり恐いと思う。たしかにアフリカのピグミーやニューギニアのセピック川流域の人たちは、森を恐がってはいない。アフリカ地域研究センターの市川さんの話を聞いていて新鮮だったのは、ピグミーにとっては森はあまねく森、あまねく生活空間で、そういう混沌たる未分化なところでなぜ恐いということがあるのか、母の胎内みたいなものだということだ。東南アジアでわれわれが知っているのは自分の周りの空間を開いて、ここから向こうは森、ここからこっちは家。ちょうど『常陸風土記』（同風土記「行方郡」）に出てくる夜刀神と人間とが境界を作るのに似ている。東南アジアの森はそういう森だ。森から一步出ると、葉はキラキラと太陽に輝いて、虫が飛んでいる。それを見たとき、恐いと思って森から出てきたとき、おおおまえたちよ、おれも助かってでてきた。ある種の同類意識みたいなものを感じてうれしくなる。闇の世界における恐さと、境界で一転して感ずる喜びというのと、村へ来てからの日常的な自分とがある。だから何処にいる時の自分を問題にしているのか、ということになる。

田中 山田さんの話と高谷さんの話とではなかなか接点が見いだせない。もう少し海域世界の生態基盤の固有性をはっきりさせたい。前田さんがこんなことを言っている。重要な論点だと思うので紹介したい。それによると、海域世界のプロトタイプとしての生活空間は、水と森の漸移帯であるという。そこに住み着いている人たちが時には狩猟をしたり、時には魚とりをしたり、交易をする。機に応じていろいろなことをやっている人が海域世界の舞台の主役だという。海域世界の森と言ったときに、例えばスマトラのクブとかボルネオのプナンとか、あまねく森で生活している人たちのことを中心におくのか、水と森の間の人たちを主役として海域世界を考えるのか。海域世界の担い手を絞ることも重要だ。高谷さんが言ったのは、すでに広がった野の空間の人が持っている森の心象かも知れないし、山田さんや古川さんが言ったのは、あまねく森、あまねく海の人たちの話かもしれない。海域世界の担い手を絞りながら固有

性を議論したほうがいい。森と水、すなわち海との狭間の生態基盤は東南アジア海域世界の固有性をになっているのか。古川さん、どうだろうか。古川さんの『インドネシアの低湿地』では、まさしく海と森の間の人たちの生きざまがよく描かれていたと思うが。

古川 森を恐いと思うのは、森に対する人間のあり方が関係しているからだ。東南アジアでは、いまは開けた野の空間が広がっている。それにもかかわらず、いろいろな違った空間を動き回る人間がいっぱいいる。ジャワ人なんて、いわゆるムラユの空間、マレー世界にいっぱいいる。そして野の人間だから森を恐がるかと思うと、そうじゃない。実際に森の中を歩く連中は、一つはクブミみたいな人々、もう一つはジャワ人だ。ムラユは実際にはほとんど入っていない。しかしそれも状況によって変わってくる。米ができないしゴムも木が古くなってできないというようなときには仕方なく、森に入るか、ということになる。そして実際に入っていく。だから海域世界の生態基盤からみた固有性は何かと言われても、結局は人間の問題だ。

V 森と海の狭間の世界——離散性

田中 生態基盤だけでは海域世界の固有性をはっきり描けないというのは当然だ。そこに住んでいる人がいろいろやっている。前田さんはその人間の活動を離散性、商品化性、ネットワーク性という三つの性格で集約したと思う。そして、漸移帯、すなわち森と海との間の世界に海域世界の特徴のプロトタイプがあるという。そこで、森と海との狭間の世界でも東南アジア海域世界の固有性がみられるのかに話題を絞っていきたい。まず三つの特徴のうち、離散性だが、これには人が空間的に移動していくことも含まれるし、前田さんはディアスポラという言葉を使っていたが、外から東南アジア海域世界に文化にしる文明にしる入ってきたときに、何もかも分散してしまうということを言っている。海域世界の中では人も情報も何もかも散らばってしまう。海と森の狭間を考えたときにこうした離散性を固有性としてあげてよいかを議論したい。

坪内 土屋さんと前田さんの関係がいちばん面白い。あるいは加藤さんと前田さんの関係も。つまり、ミナンカバウあるいはジャワとブギスまたはマレーとの関係だ。結局どこが違うかというと、前田さんの言う離散性に対して、ジャワやミナンカバウは定着性にあると思う。それを、歴史的な発展ととらえるかどうかはともかく、何か発展形態というようなものを考えざるを得ないのかなという気がする。

田中 発展形態とは。

坪内 発展というと上等なものに変化すると思いがちだが、価値判断はおいて、そうした変化をとらえることが重要だ。その変化が何を契機にして起こったかということだ。誰がそこに住んでいるのか、どれくらいの量が住んでいるのかも議論されずに、たった一人の人間が森を

どう思うか、海をどう思うかといった議論は意味がない。

田中 人の移動に限定しても、ジャワもミナンカバウも非常に流動的だと思う。もちろん、定着的なある中心ができたことによって流動性が高まるというダイナミズムが起こっているのかも知れない。しかし、移動あるいは流動という局面を見ると、ジャワもミナンカバウもかなり流動性が高い。だからあまり別のものとして考えなくてもいいのではないか。

坪内 ジャワとかミナンカバウが現われた過程は、その他の人々のと同じでなくて、何か変わったものができてきたというように考えたい。そうすると、普遍的な軸を東南アジアに持ち込む手がかりになると思う。東南アジアの固有性を議論するときにあまり普遍性を抜きにし過ぎると、東南アジアがかえってわからなくなる。固有な状態というのはある瞬間のある状態を指してそれを固有と呼ぶかどうかにはすぎない問題で、希少な人口が森に対峙して、中国ともインドとも違う状態であった時代が東南アジアの特性がいちばん現われた時期と考えていい。

高谷 要するに、ジャワとマレーは最初から違うところであると。

坪内 違ってきたんだと言いたい。

前田 私は、発展ではなく特化という言葉を使っている。

坪内 そう、特化の方がいい。ブナンの場合も一種の特化だと思う。前田さんの言う特徴が現われるのは、こうした特化した部分を除いた、狭間で生きる人々が住んでいるところだ。

田中 その漸移帯、狭間にはジャワもミナンカバウもブギスもマレーも入っている。

坪内 そういう狭間の人というのは、本当は森には関係しない人であり、海にも関係しない人だ。そういう人々が東南アジアでいちばん多いという状態を説明しなくてはならない。

田中 そうでありながら機に応じて森にも海にも関係をもつ。それが海域世界の固有の生活の仕方ではなかろうかというのが私のイメージだ。もちろん大多数は広がった狭間の中で定着しているけれども、その大多数の人たちすらも巻き込んでいるのが海域世界だ。

前田 例えば海岸に住んでいる人が必ずしも海人じゃない。海に背を向けて生活している人もいる。森に住んでいる人でも森は恐ろしいと言って森に入らない人もいる。私は、それは資源の獲得可能性と権力の問題だと思う。だから私がネットワーク性と言ったような下敷きがあっても、その上に、システムとして、あるいは権力として、あるいはカリスマとして、何かが出てきたときに、いろいろな違いが出てくる。ジャワはそういうシステムが発達し、オランラウトなどはそういうのがなかった。だから、権力論とか資源論とかをいれてこないといけない。

土屋 ちょっと異論を挟みたい。離散あるいはディアスポラ、商品化、そしてそれを作り上げていく社会関係としての自在なネットワークができるというのは、ほんとうにブギスの話なのか。むしろ、前田さん自身が、そういう人間関係のあり方がいいんだという夢を語っているにすぎないのではないか。そこらへんをはっきりさせてほしい。ジャワのほうは、とか言う前に。

前田 『東南アジアの組織原理』（前田成文，1989『東南アジアの組織原理』勁草書房）で対人主義とカリスマ的リーダーシップと圈的発想の三つを東南アジアの組織原理の特徴として書いたとき、そのあとがきかなにかに、ひょっとしたら自分の求めているものを映し出したかも知れないと書いたことがある。それに比べたら、この流動性、商品化、ネットワーク性というのは客観的に書いたつもりだ。これが基本的に出てきたのはジョホールのブギス社会のコミュニティ・スタディを通じてである。その対比として中国人とかジャワ人とかが考えられるが、例えばジャワ人はもちろん中国人だって向こうに行っている人たちはある程度こういう性格を持っている。このような人間関係を特性として抽出したのは私であるが、その人間関係が存在しているということは夢でも何でもなく厳然とした事実だ。

山田 その特性はどうして出てきたのか。

前田 それは山田さんがすでに言ったように、森と海とが持つ資源量の多さだと思う。これが、京都の商売人と似て非なるところだ。

高谷 こういう三つの特徴が出てくる背景として、私は極めて簡単なイメージをもっている。宝の森がいっぱいある。そこへ儲けてやろうと思って誰かが船に乗って来る。彼らがうまくできますものだから周りの人間が寄ってきて住み着く。基本的にはこれだと思う。

坪内 基本的に高谷さんに賛成だ。そのひと握りの船乗りが来たというのがとくに重要だ。逆説的になるが、こんなふうに来た人間はほとんどいないに等しかったということだ。周りの資源量の多さ、面積の広大さのもとで、結局、前田さんの言う流動性でもなんでもつくりだしたと考えたい。それが量として増えたときにジャワ世界ができたような気がする。だから、先ほどは発展とか妙なことを言いたくなかったのだ。

田中 とは言いながらも、時間軸としてこの二百年くらいをとると、狭間に住んでいる人たちが自身も流動化して、商品化を契機にしながら空間を広げていった。海域世界は資源がいっぱいあるところで、そこへよそから船が来る、内側から船が来る、というだけじゃなくて、住んでいる人自身が移動によって生活空間を広げる。それがたんなる野の広がりだけじゃなくて、常に商品化という形で外部の世界につながる。それが非常に大事だと思う。森や海の資源を求めて人々がうろろうして、そこから外へ運び出すだけではなくて、野の空間あるいは海と森の間の空間が広がっても、なおかつ商品化と深く結びついている。

坪内 広がって行くけれどもジャワの広がり方とは違う。田中さん流に言うとそれはゴムを植えてもいいし、何を植えてもいい。こうして次から次へ空間を広げて行くのが一方にある。もう一方、都市が同じような性格をもっている。都市の住民も田舎の農民もそういう意味ではまったく同様な質をもって東南アジアの今日の世界が広がっている。高谷さんの言う海域世界の本質は、基本的には正しいと思うが、東南アジアの本質が現れるようになったのは本当はそんなに古くはない。むしろ、中国人がやってくる、インド人がやってくる、人がどんどんやっ

てくる、18世紀の終わりとか19世紀の初めと考えるのが妥当かもしれない。

田中 海域世界の歴史性については、高谷さんがこの特集号のなかでふれているし、先に紹介した前田さんの論文でも、海域世界を六つの時代に区分して問題点を整理している。坪内さんの言うように東南アジアの海域世界の固有性が二、三百年ではっきり現われてきたのか、それともそれ以前からなのか。おそらく高谷さんも前田さんも、もっと前からだという意見だと思うが、どうか。

高谷 そう思う。ただ、イスラーム後に本当にエンジンがかかってくるが、その本性になるものは、より小規模な形で大昔からあると思う。紀元前からある。

田中 前田さんもそうか。

前田 よくわからないが、変わらない部分としてそんなことを書いた覚えがあるので、相当古いことだと考えていたのだろう。しかし、人口の問題とか生態環境の変化とかを十分絡み合わせて考えないといけないとも思うので、坪内さんの言うように、18、19世紀だと言われれば、そうかもしれないなとも思う。けれども、そのプロトタイプのものはずっと前からあるし、今もあると考える方が説明に都合のよいことは事実だ。

Ⅵ 商品化とネットワーク性をめぐって

田中 ところで、「商品化」について、言葉だけがひとり歩きしているようなので、これに関連して交易の問題とか、海域世界で商品化された物産そのものについても議論を深めたい。商品化と言うときに、いわゆる南海の特産物をめぐっての商品化なのか、生活に必要なものも含めて、何もかも商品化するのか、できれば具体的なものを念頭におきながら話を進めたい。

前田 南海物産の西洋との交易が盛んになるのは18、19世紀だ。「商品化」という言葉を使った言い訳をしておくと、私自身はほとんど交換と同じ意味で使っており、縄文時代に黒耀石が動いているというようなレベルまでも含めて商品化と言っている。その発想の元々は、海の世界はひとつのコミュニティだけでは生活できない、必ず食糧にしても何にしてもどこか他のところとコミュニケーションがないと生活できないというところから出ている。交換は海の世界では必然の前提だと考えたので、あまり適当ではないが、商品化 (commoditization) という言葉を使った。ソールハイムはオーストロネシアの海人世界を考えるときにプロトオーストロネシアン語というのがあって、元々は交易語であるという意見を言っている (Solheim II, Wilhelm G., 1984/85, the Nusantara Hypothesis; The Origine and Spread of Austronesian Speakers, *Asian Perspectives* 26 (1): 77-88)。こうした交換のレベルも入れた商品化ということだ。

田中 それなら、海の世界だけでなく森の世界も含めてということになる。

前田 そうだ。森の世界が商品となるもの自体を生み出すという意味で、森の世界は東南ア

ジア海域世界にとって必須の条件だ。

大木 海の世界は、それ単独では生活できないので、内陸部との交易や海を越えての交換が必然的な世界だというのは前田さんの言うとおりで。ただ、東南アジアの島嶼部に関して言うと、海と内陸部を本当に分ける必要があるのかどうか疑問だ。スラバヤの町ができたときの説話に非常に面白いのがある。鯨と何かが喧嘩する。それぞれの生活するところが領地だというわけで、海と陸で分ける。ところが鯨は内陸まで行くよと言って、川をどんどん遡って、ここまでが俺の領地だと言う。そんな逸話がある。彼らはある段階までは海の世界と内陸の世界をそんなに厳格に分けていなかった。

それから、実際に商品化される産物だが、たしかに森林産物は昔からたくさんの種類があった。海域世界から出てくるものを見ると、小さいものをたくさん集めてきたという感じだ。私のイメージでは森の世界はモノカルチャーではなく、たくさんの生業手段を集めてひとつの生業にするような世界だと思う。ジャワ農民がやったことは、そういう多様な世界を農業という明晰な多様性のない世界に変えてしまったことだ。ところが森林の世界では、例えば象牙や犀角は一人の住民にしてみれば何年に一本取れるかどうかかわからない産物だ。偶然のチャンスに巡り会った人だけに得られるものが、細い水の流れが集まって川になるように集まってくるのが海域世界だ。これがメインの生業であるといえないくらい多様な生活形態を森の人たちはしている。しかし、コショウが出る前と出た後では交易の規模がガラッと変わる。森林産物の中には貴重品もあるが、それだけでは大規模な遠距離の交易はできない。バラスト材のようにたくさんの積荷がないと危険だからだ。たくさんの積荷を積み込んでもある程度の利益が得られるものでなければいけない。コショウが最適な商品となり、ものすごく大きな交易が始まる。沈没船とか略奪船の中身を見るとわかるが、大きな国際交易が活発化すると同時に、日常生活品など東南アジア内部の交易も盛んになってくる。つまり国際交易と国内交易が同時にリンクされて交易の時代となる。

田中 商品化だけでなく、海域世界の社会組織の固有性についてもあわせて議論しておこう。とくに、もう一つの特徴であったネットワーク性というのは本当に他の世界と違う固有性なのかどうか、議論してほしい。

大木 ユダヤ人のもっているネットワークもあるし、ハンザがもっているネットワークもある。バイキングのネットワークもある。

土屋 しかし、時間の観念は違うと思う。大木さんの言ったネットワークでは時間は積み重なっていると思う。ところが、東南アジアは、フィルムのとえでいうととても感度がいい世界だ。他の世界が仮りに ASA100 ぐらいだったら ASA1000 ぐらいの世界だ。ものすごくセンシティブに外の世界と連動している。そういう世界だから発展段階という考えではなくて、外で何か変わったときにそれと連動して、いつもものすごくダイナミックに変わる性格を秘めて

いる。そして実際に変わってきている。そうしたら東南アジアがまったくなくなったり、全く違うものができてくるかというところではなくて、依然として何か東南アジアなんだ。その何かというのが固有性だ。今年の夏、ヨーロッパを旅行して、ウイスキーのコマーシャルで、時は流れないそれは積み重なる、というのがあったのを思いだした。ヨーロッパはほんとうにそうだ。時間が流れてない。時間は教会の外壁の上に石がどんどん積み重なっていくように、積み重なる。だから発展段階という考えがでてくる。発展の層とそのために要した時間とが目に見える。後の世に残る。それに対して、東南アジアでは時は流れるだけだ。流れては消え、流れては消える。そのたびに ASA1000 ぐらいの感度で反応している。

田中 非常に感度のいい社会がネットワーク社会だと言い換えてもいいか。

大木 感度がいいという話は、東南アジアの固有性と言っていいのだろうか。それだけなら東南アジアに特異なことではないだろう。

前田 その特異性と固有性というのが私もよくわからない。東南アジアの特異性を求めたら、例えば、他の地域にはあまり見られないオランラウトなど少ししか残っていない人たちを抽出して、これが東南アジアの特徴といえよ。そういうのを狙うのか、一般的に東南アジアにみられる属性を狙うのか。私は後の方で、双系制とかどこにでもあるのをこれまでやってきた。東南アジアの固有性（ということは、とりもなおさず東南アジアの中に限れば、一般性であり普遍性である）を探究しながらいつのまにか人類全体の人間性を問い、探究している。そういうすりかえがいつも起こってしまう。

大木 時間軸が全然ないから困るんであって、ある時代の東南アジアがこういう固有性、特徴をもっていたということが必要だ。

土屋 だけど停滞しているわけではない。ものすごくセンシティブに変わる。

大木 私が言っているのは停滞とか発展じゃなくて、ある時代の東南アジアはこういう特徴をもっていた。この時代はこう。通時的に全ての時代を貫いて東南アジアはこうだというのは無理だ。

坪内 私は、意外に、その変わらない特徴が大事な気がする。

大木 もちろん大事だけど、言うときにはかなりしっかり限定して言わないと。

田中 前田さんが言いたかったのは、時間性を越えて、常に離散する世界であるとか、商品化が常に起こる社会だとか、常に社会がネットワークという形でしか形成されないとか、それが東南アジアの海域世界の固有性だということではなかったか。いわば超歴史的な固有性だ。それでいいのか。

坪内 私はそれに賛成。大木さんの言う時代性の問題だが、それを否定しようとするところに面白さがあると思う。非常に古くから胚芽というか胚珠というか、胚という形でその固有性が遺伝子の上に閉じ込められていて、時代とともに、他の要素を含みながら広がっていく、あ

るいは雑多になりながら成長していく。しかし、それが成長して膨れきったときにも胚珠のもつ本質は完全に失われるものではない。依然として古くからの性質を持っている。そんな見方をするのも面白かろうということだ。

大木 時間軸を短く取るとそれでもいい。しかし、東西交易の始まる前の東南アジアに本当にそんなネットワークを想定していいのかどうか。だから妥当するのはせいぜい千年くらいの話ではないか。紀元前何千年も前から東西交易があったとすれば、普遍的、あるいは超歴史的と言ってもいいが。

前田 私の言うネットワークは、東西交易のレベルでなく、もっと地域的なものだ。

大木 そのくらいのレベルでネットワークというのなら、他のところでもあった。縄文時代の交易程度のものなら、日本だってあるし、おそらく地中海だってあっただろう。固有性を超歴史的に求めるというのは無理だ。

土屋 固有性を求めるというのは言い方がよくない。前田さんが言うように、固有性を離れて特化するわけだ。何かの契機があってジャワはジャワのように逸脱し、海人は海人に、森の民は森の民に逸脱した。その契機が何かということがうまく解ければ、逆に、海域世界の本質が解けるかもしれない。

大木 契機というのはすごく時代性をもっているはずだ。あるいは時代的な問題じゃなく要素ということか。

土屋 わからないけど、ジャワは外から大きく感光してしまっていて戻れなくなった。

坪内 ネットワーク性というような言葉を要素として抽出したときには、普遍的なあるいは一般的な使い方しかできない。それにどんな色をつけるかということがより重要だ。だから、東南アジアでは、ネットワーク性にどういう固有性を盛り込んで理解するのかという問題と、ネットワーク性それ自体が卓越しているという問題が二重に絡んでいる。

大木 だから、どういうネットワークなのかが問題だ。

田中 中心をもたない、あるいは大きな中心ができないネットワークだということではないか。社会もそうだし、家族もそうだし。前田さんに話してもらうのがいいかもしれない。

前田 中心とネットワークを対比させて考えているが、社会というのは中心とネットワークがないといけない。どこの社会でもある程度の中心、ある程度のネットワークがあるわけで、両者が対立するという発想自体がおかしい。それにもかかわらず、ネットワーク型社会とか中心型社会と言ったのは、大きな中心で大きな外枠をもっている社会と、外枠無しで小さな中心がたくさんできる世界とがあるからだ。その二つは非常に相対的なものだが、両者を対比させてみると、東南アジア、なかでも海域世界というのは後者の社会だ。そういうネットワーク型社会はもっと下のレベルでいえば対人主義的な人間関係に支えられている。だから、大きな中心をもったシステムが東南アジアにできなかったという言い方もできる。

田中 ネットワークという場合、もう少し視覚的に考えたい。大木さんが最初にジャワ海の世界だとかマラッカ海峡の世界だとか、海域世界をもっと細分する見方があると言ったが、海域世界には、圏とも呼べるようなネットワーク社会が複数あるようなイメージなのか、それとも東南アジア海域世界イコール大きなネットワーク社会でいいのか、どうか。

前田 私のイメージでは、ネットワークというのは濃いところもあるし、薄いところもあるし、明るい色がついているところもあるし、暗いところもあるし、モザイクのようになっているところもある。ジャワ海、スルー海と分けないといけないというのもよくわかるが、そういうレベルの話ではなくて、東南アジア海域世界を見てみると何か結び付いている。そのレベルというのは川上と川下のネットワークかもしれないし、ブギスなどの場合は、スラウェシからマレー半島までのネットワークかもしれない。要するに、人間関係を基礎としたネットワークが縦横に張り巡らされている。それが社会圏を構成するわけであるが、圏から見るとその外延はホロンの性格をおびざるを得ない。

加藤 ネットワークは何かという説明があると権力のあり方がわかるが、言葉だけではわからない。土屋さんが指摘している、時間の感覚が違うとか感度がいいというのは、結局、権力のあり方に関係している。東南アジアの権力のあり方を示すような別の特徴を与えたほうが分かりやすいと思う。

大木 細分した場合に固有の小海域世界が抽出できるかどうかは今後の課題として面白い。ある時代は細分した部分が重なりあったり、ある時代は普遍的に広がっていたりするかもしれない。地域性と時代性を考える必要がある。しかし、分けなくてはいけないということではない。分けたときに、例えばシャム湾世界とジャワ海世界は同じかどうかという問題提起だ。

加藤さんの言う権力の問題も大切だ。例えば、マジャパヒト王国以降のジャワ海およびマレー世界はものすごく変わる。ある人間が権力をもとうとすると、マジャパヒトの王子をもらってきたくなる、あるいは嫁にやりたくなる。必らずマジャパヒトの王権とむすびつけて正当性を確保していくのは、マジャパヒト王国以降のジャワ海、マレー世界のネットワークのあり方だ。権力の頂点だけではなくて、一般民衆もネットワークを作る。例えば、イスラームが東南アジアに何をもたらしたかという、それはネットワークだ。サウジアラビアとジャワもスマトラも人間関係でつながっている。大きな問題が起きると連絡を取り合いながら解決する。しかしサウジアラビアが中心ではない、ネットワークだけで東南アジアにつながっている。

田中 加藤さんの問題提起は、例えば支配の正当性を確保するためのネットワークではなくて、実効的な支配の機構、あるいは力の及ぶメカニズムが本当にネットワーク性と呼べるものであったのかどうか。仮りにそうだとすると、それを表現するのにどんな言葉がいいかということではなかったか。

高谷 マジャパヒト王国ができてから、例えばジャンビのような弱い王様はその王家の人を

もらってくる。それは、私の考えからすると非ネットワーク性だ。むしろジャワを中心とした中心性だ。実際にジャンビの王様はどうしたかという、マジャパヒトから借りてきたおっさんはマジカルなパワーがあるので、これは王様にしておく。しかし、在地の酋長、これは集荷を担当する国務大臣、別にスラウェシから流れてきたブギスのおっさん、これは海軍大臣。ジャンビそのものを見れば、王権なんてなくて、寄せ集めの会社みたいになっている。それをネットワーク性と考えたい。だから、マジャパヒトから王子が来たというのはむしろ中心性の話であって、ネットワークを考えるとすれば、目をつけるべきはむしろジャンビの構造だ。

大木 そのとおりだ。しかし、私が面白いと思ったのは、マジャパヒトが権力の中枢につながるというようなネットワークがあるということだ。少なくとも、ジャワ海やマレー世界はそう。そういう意味では、中心のあるネットワークだ。

加藤 ネットワーク性というのは、そのレベルの話でなく、もっとごく普通の一般民衆のレベルの話ではないのか。

田中 前田さんのネットワーク論の一つの大きな便利な点は、ネットワークそのものを伸縮自在にとらえられるということではないか。たとえ大きな中心ができようともいつまでもそれは続かない。それが他のところに移るかもしれない。小さく幾つにもなるかもしれない。しかし、ともかくそういう網の目がいつもできている社会が海域世界だということではないのか。強固な中心がそびえ立ったシステムが長年続くというところではない。

大木 それは東南アジア全域の中心になるようなものが永続きしないということか。

前田 東南アジア全域を見ればそうだろう。もう少し小さいレベルでみてもいいけれど。

高谷 中国なんかと比べれば断然違う。

加藤 マジャパヒトからやってくるのは人間だ。それ以前は、王権の正統性を説明するのに、神様の生れ変わりだとか、ナガと結婚したとか、ブラーマンと結婚したとかだ。マジャパヒトの末裔という方がいろんな小さい中心をつくりやすい。そういうことから考えると、マジャパヒトと関係づけるだけでいいわけだから、どこにでも小さな王国を作りやすくなったということだ。だから、これもネットワーク社会とよく合致する。

VII 海域世界と森

田中 東南アジアの海域世界は、政治権力のレベルから庶民の生活のレベルまで含めてネットワーク社会だと、ひとまずしておこう。いろんな問題がまだ残っている。例えば、先ほどの森と海の狭間の問題はとも人間のほうの議論に終始してしまったが、狭間が拡大しているということは、実際には、海が小さくなっているのではなく森が小さくなっているということだ。一方、東南アジアの海域世界の固有性は海の後ろに森が控えていることにある、という高谷さ

んの意見もある。とすると、森の減少という大きな変化のなかで、これまで議論したような海域世界の固有性がなくなっていくのか。あるいは、にもかかわらず、海域世界の固有性は持続していくのか。森の問題をめぐる、もう一度議論したい。

大木 またジャワの話で恐縮だが、ジャワの森林の破壊を話したい。これは、かなり古くからあったらしく、マタラムのように古代の王国のあった中心部付近は焼き畑をやりすぎて岩盤が露出してきて、かなり破壊が進んでいたらしい。まだ実証していないけれども、ジャワの森林破壊は部分的だが古代にかなり進んでいた。だから全体としてはかなり残っていたとしても、ある地域を集中的に使うという意味ではかなり昔から森林の破壊が進んでいた。もちろん、当時はまだまだフロンティアは残っていたが。

高谷 その最初はディエンあたりだ。6世紀ごろそこでまず森がなくなる。だが隣りにはまだ残ってる。以後、シンゴサリに移っていく。都がどんどん遷って、その都度森がなくなっていく。その都度、スポット的にジャワ的な空間ができていって、結局、全面的な森林の減少が進むのがマタラムのイスラーム王国時代からではないか。

大木 驚いたのはジャワの場合に1870年代に70%が林野で覆われていたのが、1910年くらいになると10%代に落ちる。ジャワ人は森を全部食いつぶしてしまった。この森林の急速な減少は、彼らの森林観と密接に関係しているはずだ。彼らにとっていいところだったのか、恐ろしいところだったのか、あるいはどれくらいの恵みを与えてくれていたのか。日本はジャワと同じように非常に人間の多いところだけれど、青々と森林が残っている。なぜ日本はジャワにならなかったのか。これが謎だ。オランダ人が河口の港を占拠して河川の交易を断ってしまったために、海と内陸の世界が離れる。離れきったときに農業はいくところがないから一気に森をつぶして耕地にする。おおざっぱだが、こういう変化が起こったことが原因ではないかと思う。いまタイではトウモロコシがものすごい勢いで森をつぶして入り込んでる。あの行動パターンはこの当時のジャワ人とよく似ている気がする。森が与えてくれる豊穡さに比べたらトウモロコシの方がより豊かだと判断したから森をつぶしたのであって、農民としてはそんなに森はいいものだとは思っていなかったのではないか。

同じことは、飛騨の朝日村の奥に住んでいる人たちと話をしても感じる。かつて焼き畑をしていたところに育った森を切り払った。そこで嬉しそうに彼らが言うには、森を切り開いてようやく元の状態に戻った。蝶が飛んで来たり花が咲いたり、すばらしい世界が復元した。そういう話を聞いていると、山に住んでる人達も必ずしも森はいいものだと思っていないのかもしれない。結局のところ、熱帯の森林はそんなに豊かではないようだ。高谷さんが書いていたが（高谷好一、1985『東南アジアの自然と土地利用』勁草書房）、東南アジア大陸部の森林からは140種類くらいのものを取り出していた。ところがジャワの場合は食料になる森林産物は非常に少ない。日本の森林がなぜつぶれなかったかと言うと、とにかくたくさんの食料がある。

しかも保存のきくクルミとかトチがたくさんあり、森林の豊かさを感じる。ジャワの農民が同じように感じていたのかどうか。もし感じていたとすれば30年間くらいでなぜ森を食いつぶしてしまったのか。これがよくわからない。

田中 重要な問題は、例えばジャワがそうして森林をなくしていったときに、ジャワは海域世界でなくなるのか、あるいは森林をなくしても海域世界なのかということだ。さっきは、ジャワも海域世界だということにしたが、もう一度、森の問題を絡めながら海域世界について議論したい。高谷さんは、この特集号への投稿論文の中で、東南アジアの海域世界の特異性というのは森にある、森が残っていることだと言ってる。高谷さん、どうか。

高谷 ここは二派に分かれるね。私はジャワそのものを見ると海域的でなくなった、海域をやめたと思う。しかし、全体的にみれば、まだ、広い海域世界の中にジャワというものが析出してきた、という程度だ。もっと言うならば、21、22世紀にはほととけば全部ジャワになっているかもしれない。そういう歴史の断面をいま見ていると思う。

坪内 それにもかかわらず、森がなくなっても今の特性は残るという考えはどうか。

高谷 僕は残らないと思う。「海域」という特性は残るだろう。しかし、「東南アジア的な」海域世界はなくなる。

坪内 高谷ふうにとれば、東南アジア的な海域世界はむしろすでになくなっていると考えていいか。

高谷 いや、なくなっていないと思う。私は最初、港は一期一会と言ったが、しかし、だからといって本当に悪いことをしてもいいというわけではない。出会いのルールというのがあるわけで、そのルールが前田さんの言うネットワーク性とか、対人主義という形で現れていると思う。そして、それは砂漠におかれた二人の対人関係でなく、森に取り囲まれている二人の対人関係だということだ。

田中 東南アジアの海域世界というのは、現在でもなおフロンティアがどんどん拡大している世界だと思う。野の拡大、すなわち森林の減少にもかかわらず、前田さんが言ったような三つの特徴をもった世界が広がっている。その広がりの中で見るとは顕著なフロンティア性だ。私は、そのフロンティア性が続くかぎり、東南アジアの海域世界としての特徴は残ると思う。ただ、野の拡大で狭められつつある森自体をどう考えていけばいいのか、実際のところよくわからない。

大木 森だけで考えるとわからなくなってしまう。昔の東南アジアでも海と関係していた森と、関係していなかった森があったと思う。スマトラの森はかなり海に関係していたと思うが、ジャワの森はどの程度海に向いていたかはわからない。というのは、ジャワの特産物は圧倒的に米が重要であったわけで、それは森が消えたところではじめて生みだされるものだからだ。森林産物はあまり出ていない。だから東南アジアの海域世界といっても海と関係していた森と、

関係していなかった森がある。あまり海に関係していなかった森は、いったん商品作物が入ると一挙につぶれる、タイのトゥモロコシのように。このまえ、飛驒の二つの村を歩いていてアレッと思ったのは、彼らはほとんど海なんて考えていないということだ。材木を出しに川に乗っていくが、すぐ近くで皆引き返す。だから、全ての東南アジアの森は海域世界に取り込まれているとは思えない方がいい。

高谷 ほとんどの森は海に関係していたと思う。ジャワは違ったかもしれないが。

大木 いや、前田さんの言っている固有性は海だけで成立するものかもしれない。

前田 海だけで成り立っている世界ではないと思う。

大木 だから森とセットにしなくてはいけないというのはわかるが、東南アジアの森が結局どういうものかという、依然としてよくわからない。

高谷 はっきり言えと言われると、東南アジアの森にはカミがいる。ところで普通に海域世界と言った場合は、ただ単に海を主な舞台にした世界という意味だ。ところが、東南アジアの海域世界と言った場合には、この普遍的一般的な海の世界の特性の上に、さらに加えて、背後には森があるぞ、というそういう世界だと思う。だから、森が消えたら東南アジアの海域世界は消える。そんな危険性を私は感じる。

田中 その問題はそんなに単純なものじゃないと強調したい。なぜかという、森と海の狭間で森にも海にも関わりながら機に依じていろんな生業を選ぶ人たちが海域世界の主役であるという考えだからだ。いま森を切り開いて、たとえばプランテーション作物をつくる。かつては、ジャワの農民が森林を切り開いて農地を作っていた。その結果、海域世界がなくなったのではなくて、森が他の緑に変わっただけで、海域世界の固有性は続いているように思う。だから森がなくなったときに、東南アジアは海だけの海域世界になるのではなくて、中間帯の広がったところが結局同じような固有性をもち続けていくように思う。

坪内 ひとつだけつめておきたいことがある。高谷さんの言う東南アジア的な海域世界という考え方からすれば、シンガポールはどうなるのか。私は、海域世界だと思うが、東南アジア的な海域世界ではないのか。

高谷 それは難しい質問だ。私は海域世界というのは、それこそバルト海から地中海を通じてインド洋、東南アジアへと虹みたいに連らなっていると思う。そこには海域性という普遍性がある。しかし、海域性と森林性をあわせもつ世界がある。それが東南アジアの海域世界だ。その森林性がかなり希薄になったのがシンガポールだと思う。では、それは東南アジアではないのかと言われると、考え込んでしまうが、まだ東南アジア的だ。1819年をとれば今よりもはるかに東南アジア的だっただろう。しかし、急速に変わっている。だから、私は森がなくなったら東南アジアの海域世界がなくなると考えているのだ。

大木 東南アジアは海の世界だというのはわかる。ところが、東南アジア固有の海域世界と

いうのは森林性だというあたりがよくわからない。その場合、東南アジアの森林性は具体的にどんなことか。

高谷 具体的によくわからない。ただ言えるのは、ハッとする、恐い、というのがあると思う。あるいは非日常的な空間。自分の力ではどうにもならない、奇怪なものがあるというのが東南アジア海域世界にとっての森の重要性だ。山田さんが言うのとは違う森だ。暗さ、恐さ、非日常性を考えるのが必要だ。

大木 森が恐いのかどうかは、そこに住んでいる人が評価すべきことであって、われわれが簡単に言えるものでない。狩猟民にとっては優しい存在だけど、農耕民にとっては恐いものでなく、ないほうがいいというほどのものかもしれない。

田中 海域世界の重要産品である森林物産を産するところとして森を見るのか、あるいは、心象としての観念世界の一つとして見るのかで、海域世界における森の位置づけは変わってくる。

大木 観念世界の中に特異性をもつということ以外には、あまり特異性はないのではないか。

高谷 いや、ある。暗い巨大な常緑樹の森林があるというのは、東南アジアの森の特異性だ。なくなりつつあるけれど、まだ残っているし、心の中にも残っている。

山田 森がなくなったらどうなるかという議論だが、そんなことは状況の変化とともに自然にまた変わっていくだろう。森がなくなればなくなったで、また食べるものを求めて人は移っていく。いまはまだ森があるからそこに人が関わっているけれど。例えばフィリピン。森がなくなったからといって、社会が変わってしまったわけではない。ネットワーク性をもった社会はいまも綿々と続いている。

田中 そう、海域世界というのは、固有性を維持しながら続いていくことになる。

大木 海域世界は続くけれども東南アジア性というのは森がなくなれば終わるということか。もう一つ、森の性格がよくわからない。

VIII 海域世界研究の意義

田中 森の議論はこのくらいにしておこう。森林の問題は、いまや地球規模の問題だからすでにたくさんの議論がでている。ここでは、東南アジアの海域世界としての森の意義をもう少しつめておきたかったが、どうも、議論が堂々巡りになってきた。それで、最後に、これまでの議論のまとめとして、海域世界研究の意義について議論しておこう。とくに東南アジア島嶼部各国の独立以後の国民国家の形成の過程を見ると、これまで議論してきたような海域世界の性格がだんだん希薄になっているかに思える。野の世界の拡大、国民国家の形成という二つの要因があって、この数十年の間に海域世界が随分と実体的にも、視覚的にも狭まりつつあるな

座談会

かで、私たちは「東南アジア海域世界の森と海」のテーマを掲げている。その意味をこれまでの議論のまとめとして考えておきたい。高谷さんは、この特集号への投稿論文の中で、東南アジア海域世界研究の意義を五つほどに整理している。第一に海域世界の変容に関する歴史研究の必要性、第二が世界のさまざまな海域世界の比較研究への展望、第三が海域世界が持つネットワーク性の現代的意義、第四が都市研究への発展可能性、そして最後に東南アジア海域世界のいわば世界史的にみた特異性としての森の重要性、などを指摘している。そこで、高谷さんからまずその意義を話してほしい。

高谷 世の中には中心型の社会とネットワーク型の社会があると思う。中心型の社会は強い。過去の歴史を見ても、現在を見ても、中心が固められた強い空間と弱い空間がある。今の世界は強い空間が偉そうにしている、お互い角を突き合わせる構造になっていると思う。そのあいだに入ってネットワーク型の弱い社会は時にはずるがしこく振る舞ったり、時にはつぶされたりしながら生きている。だけど弱い、私の言葉でいえば他形というが、他形のネットワーク型社会があってはじめて世界はひとつのまとまりのあるものとして構成されてくる。東南アジアの海域世界はその他形のネットワーク型社会の典型だと思う。そこで、再び森と海に還るわけだが、重要なのはその二つを結ぶ港だ。その二つというのは、海と森でもあり、中心型社会とネットワーク型社会でもあるが、その港にいろいろなものが寄り集まっている。そしてある種のルールが自然にできている。港は ASA1000 の、極めて鋭い感光性がありながら、積み重なっていかないで消えていく。けれども、常に火花を散らしながらそこでバランスを保っている世界だと思う。そして、そのバランスがどこから出てくるのかというと、港だけではだめだということだ。その後ろにハッとさせられるような森があり、非日常の空間があり、入っていったらオバケが出るようなところがあって、それと背中合わせになった港があるという、この組合せが大切だ。そこでは ASA1000 の感光性をもった人たちが動いている。しかし、彼らはそこでずっと長いあいだしっかり頑張るのではなくて、中心型社会と中心型社会の間で巧妙にバランスをとりながら振る舞っていく。このバランスを持った生きざまにこそ、世紀末を生きるヒントがあるのではないか。

田中 同じようなことを、古川さんが『インドネシアの低湿地』でも触れている。海域世界の森と海の自然資源と人の関わり方というか、与えられた自然資源とのつきあい方、利用の仕方というか、海域世界とかムラユ世界の人々の生活から何か教えられるところがあったように思う。海域世界研究の意義はどんなところにあるのか。

古川 高谷さんの言っていることに賛成だが、研究の意義を一言で言うのは難しい。ここしばらく海域世界で調査をしてきたが、いまのところは人間の本質に迫るようなところはまだ出せない気がする。いろんな事実の積み重ねが必要だし、大木さんが言うように、時代、地域を区切ってより精緻な研究を積み重ねるのも必要だ。また一方で、東南アジアが秘めもつ普遍的

原理を求めていくのも重要だ。そんなことを考え、実践するのに海域世界はすごく面白い地域だと思う。でも、正面切ってその意義はと言われても、なかなか答えられない。

田中 前田さんはもう少し文明論的に海域世界研究の意義を語っていたように思う。これまで議論されてきた三つの特徴をもとに、「ある意味では融通無碍な強靱さをもったモデルである。ネットワーク社会というのは、個人主義と国家主義とに対抗する、思いやり、分け合い、つりあい、世話の倫理を核として、規則や法によるより状況を重んじる対人バランス感覚の発達した社会である。……国家の硬質な制度による規則をきらう社会のモデルの一つとして、あるいは一つの文明のパラダイムとして、発展させることもできる」(前田 前掲未刊行論文)と言っているが、いかがか。

前田 正面切られて言われると、オーソドックスな解答をしなければならないが、それを喋るのはいささか面はゆい。海からの視点というのは日本史でも流行になっているが、海から見た視点とか、陸から見た視点とか一つひとつのエコロジーを分けて考えるのではなくて、森と海とそれをつなぐ結節点を一つのエコロジカルなセットとして考え、海域世界でどういう原理が働いてるのかを考えるのはひとつの大きな意義があると思う。それが第一点。そういうふう考えたうえで、いろいろな原理とかそういったものを自分に納得いくようにして出していく。それが私がいう三つの特徴だ。その三つの特徴の文明史的な意味というのは、さきほど高谷さんが言ったことと同じようなことになると思う。

田中 どうも堅苦しい質問でまとめにしようとして申し訳ない。東南アジアの海域世界は、これまでいわゆる大航海時代や植民地時代のマリタイム・ワールドとして歴史学の分野を中心に盛んに研究されてきたが、それをこれから人類や世界の問題として研究しようとする視点はなかったように思う。議論は、司会の不手際もあってやや具体性に欠けるきらいもあったが、海域世界研究が秘めもつ面白さや意義はなんとなく共有できたのではないかと思う。古川さんが言ったように、まだまだいろいろなことを調べていかねばならないということを肝に銘じて、いちおう、このあたりでお開きとしよう。